

エッセイ「最も胸アツ！！Nursing エピソード」(看護師の部)

最優秀賞受賞作

黒子

佐藤 健斗

病院という場所で、私は表舞台には出ない。

「先生。どうもありがとうございました。」「看護師さんがずっと手を握っていてくれて、本当に心強かったです。」患者さんが私を認識することはない。私が患者さんの前に姿を現したとき、患者さんはすでに全身麻酔がかかって意識がないから。時に虚しい気持ちになって、やりがいを感じられなくなってしまうこともあった。それでも、私は自分の働きに誇りを持っている。「器械出しに看護なんてあるの？」そう言われたって構わない。

あの時私が手術の流れを読んで前もって準備をしていなければ、腹腔鏡から開腹に迅速に移行できなかった。

あの時私が洗浄用生食の温かさを確かめないまま医師に渡していたら、患者さんを凍えさせてしまっていた。

あの時私が針のカウントが合わないことに気がつき、勇気を持って声をあげていなければ、患者さんの体内に針が遺残してしまっていたかもしれない。

思えば、ほかにもたくさん「あの時」がある。そして、それらが確実に患者さんの「今」につながっている。この数々の「あの時」こそが、私が実践してきた「気遣い」なのであり、常に手術という体験を患者さんと共有している私にしかできないケアリングなのである。

私は手術を陰で支える黒子。ほくろではない、く・ろ・こ。いや、くろご？黒衣？

歌舞伎で黒子なくして演者が綺麗な演出をすることができないように、私の働きなくして安全な手術の遂行はあり得ないだろう。私の一挙手一投足が手術に、患者さんに影響を及ぼしてしまう。そんなプレッシャーもあるけれど、私は器械出し看護が好きだ。

だから安心してほしい。

患者さんが手術を受けている時、私は必ずそばで見守っています。

(選評) 淡々と、しかし力強く手術看護の魅力と共に、手術室看護師の特徴である器械出しの中の看護について語られた作品です。

手術室看護師は縁の下の力持ち、見えないアドボカシーとして、表舞台ではその存在が知られなくても、器械出し看護師として、自身の役割や価値の大切さを見出しています。それを誇りとして頑張っている姿がとても良いと思います。

エッセイ「最も胸アツ！！Nursing エピソード」(看護師の部)

優秀賞受賞作

老いても子には従わない

川上 将

「老いては、子に従え」とは、年を取ったら意地を張るよりも、子どものいうことに従うほうがよいという意味である。

しかし、手術の現場においてはどうか。患者となった超高齢者のAさんは、医師からの説明を受け、家族からの強い希望もあり、いったん手術を承諾したが、難しい手術であることも認識していた。

当日、手術室に入り手術台に臥床する直前に、本人から「手術はしない」と正直な意思決定がなされた。これに対し30分以上の時間と、医師、家族が再度Aさんと手術意思について再考するため、手術室が専有された。

手術を継続したい医師と家族、手術を中止したいAさんと手術室看護師の壮絶な対立がはじまった。家族は「老いては子に従え」と家族の決定も自己決定だと言い、医師も「この時期を逃してはもう手術はできない」とたたみかける。最初は医師・家族連合に押されていたが、看護師側もAさんのことを知っている病棟スタッフや課長や外来スタッフを投入し、本人の意思が尊重されていないと反論した。結局、最後まで意思が揺るがなかったAさんの意思決定が認められ、手術は中止となった。手術室スタッフだけでは押し負けていたかもしれない事態に、Aさんのことをよく知る周術期スタッフの投入は反転攻勢の良い機会となった。

Aさんはその後、3ヵ月もしないうちに他界してしまったが、家族からは病院にお礼の挨拶があり、「あの時は意地になっていた」との言葉もあった。

日本文化として「老いては子に従え」とあるが、超高齢者が自律尊重に基づき、手術を本当に望んだものであるかを明確していくことが重要であり、手術同意後の本人の意思を追い続ける最後の砦が手術室看護師でなくてはならないと感じたエピソードであった。

(選評) 非常にまれな体験談ではありますが、手術看護の本質を考えさせられる作品です。また、患者さんの意思を尊重することの具体的な体験談により、「手術を行うことが、患者さんの目標ではなく、人生の目標を達成するためのツール」であることを再認識させられました。一般の方には、医師に立ち向かってでも、自分の意思を伝えてくれる手術室看護師の素晴らしさをわかっていただけるエピソードです。

エッセイ「最も胸アツ！！Nursing エピソード」(看護師の部)

優秀賞受賞作

手術室看護師にしか見えない景色

齋藤 友厚

ある日の正午、手術室の電話が鳴った。脳外科医師より、『妊娠 24 週。交通外傷で瞳孔不同あり。頭蓋内圧亢進のため緊急で開頭減圧術』との一報だった。母体・胎児ともに救うため、救急車到着後ただちに手術室へ入室と決まった。救急車到着まで 6 分。いま動けるスタッフを総動員し、麻酔薬の準備から手術室内および手術器械の準備が同時に行われた。救急車到着から手術室入室まで、わずか 3 分。手術は無事に終わった。

数ヵ月後、外来看護師に付き添われ、赤ちゃんを抱いた女性が手術室を訪ねてきた。「その節は大変お世話になりました。おかげさまで、この通り親子ともに元気です。先生から、手術室の受け入れが速くて助かったのだと伺いました。本当に、ありがとうございました」と、お礼を言われた。はじめは何のことか解らなかったが、話を聴いているうちに、あの時の妊婦さんだと思い出し、当時の記憶が鮮明によみがえった。

その時、赤ちゃんは満面の笑みで、“キャッキャッ、キャッキャッ”とはしゃいでいる。その笑顔は、窓もない閉鎖的な手術室に爽やかな風を吹き込み、ポカポカと温かい陽光をもたらし、まるで壮大な草原の中で静かに景色を眺めているような幸せを感じさせられた。この景色は、手術室看護師にしか見ることのできない景色だ。

手術室看護師が患者と関わるのは、主に手術中である。病棟看護師と比べ、その時間は極端に少なく、「ありがとう」と言われることも少ない。だが、この景色を見ることができるところこそ、手術室看護師として今日も頑張れる。

生まれる前から大変な困難を乗り越えた赤ちゃんには、素晴らしい人生が待っている。そう願わずにはいられなかった。

(選評) 手術室看護師の役割の中で術中看護に徹することが、患者さんの日常やその後の人生に繋がっていることも感じられました。手術室を退室して終わりではなく、患者さんが日常に戻っていったあとの良い景色(「壮大な草原の中で静かに景色を眺めているような幸せ」)が浮かんでくるようでした。その光景がやりがいとして頑張れること、とても素晴らしいと思いました。